自主管理社会の構想

ブルードン主義的自主管理論のために

大橋 正義

一 ブルードンと自主管理

現代世界の政治―社会的諸関係の総体的変革を構想するにつき、ブルードン主義のもつ意義は誰しもこれを無視することができない。左右の国家管理主義的絶対主義の世界支配の只中であって、革命観の中核をなし、常に立ち帰るべき原理的立脚点としてそれは存在している。

ブルードン主義の根底に存在するのは、反・絶対主義である。これは現行社会に対する批判を可能とし、うちたてられるべき諸関係をも導き出す。反・絶対主義は三重の視角によって成立する。すなわち、1 神秘主義―人間による人間の崇拜、2 資本主義―人間による人間の搾取、3 国家管理主義―人間による人間の支配。これらに対する批判はブルードンの宗教 資本 国家への批判に対応している。これらの批判的視角を保證するものは、人間に対する人間の権威の否定すなわちアナルシーにはかならない。これより流出するアナキズムの積極的な論理は、一言

で、自主管理（社会体系の管理の自律性）である。三重の批判視角と対応させると、1 積極的アナルシーとしての人間による人間の自由の確立、2 社会的労働を媒介とした人間による人間の現実化、社会化、社会的正義の現実化による、人間による人間の理想化、3 社会的多元主義―自主管理的連合主義による、人間による人間の解放である。

二 社会学的基礎

ところでブルードンの基本的思考態度、方法を、まずもって確認しておこう。すなわち、かれの多元主義としてあらわれる社会認識の仕方である。かれに資本家的所有批判を成立せしめる地盤は、ブルジョアの個人主義的アトミズム（これは社会のうち諸個人の単なる合計をしか見い出さない）に対する批判的見地である。個人を個体として孤立したものとして抽象することは不可能なことではない。しかしそれは空虚な抽象であろう。諸個人は、具体的な機能連関のうちに集合的存在として実存している。個人と社会とは、集団性の開示する諸次元において規定

される機能的にして集合的な存在として、なによりもまず把握されるのでなければならぬ。そして社会がその存立の不可欠な条件として労働を必要としているのだから、社会に経済的には、諸個人は壮大な職能的諸関連のうち実存しているといわれねばならない。かかる「集合的存在」は、その形成する集団の各次元において、それに固有な生産性を成立せしめていること、すなわち、集合力が存在する。また、この集合力の帰結としての生産的剰余が存在していること、これはブルードン主義の最も重要な基礎視角をなしている。ブルジョア的、個人主義的アトミズムはこの事実を把握しえず、その最も反動的な表現を経済学のうちに見い出す。集合的生产を見誤り分解された諸要素によってその思考を組み立て、私的所有を前提とする理論によつては、現行社会における集合力の疎外、したがって集合的な生産的剰余の資本家的先取、「ただ一人の個人による集合的生产物の領有」が把握されるはずもなく、かえって私的所有の悪をインベイスする役割を果す。

また「集合的存在」たる社会の集合力は、おのれの分節化した一肢節として国家を疎外している。しかるに現行社会——資本主義であれ国家管理主義的共産主義であれ——においては、国家は、社会的多元性においてそれに固有な機能を果す機能的集団として他の諸社会集団と等位関係的地位にあってその役割を果すのではなく、他の社会的要素の外にあり、優位する支配者——国家として存在している。これは、集合力の疎外の、社会的諸集団間の機能連関の社会的秩序づけの不在の一表現である。国家は、資本主義においては、体制保護主義的精神主義、国家管理主義的共産主義においては、体制保護主義的、護教論的唯物論によつてお

のれを神秘化している。かかる現実を多元主義はとらえ返し、社会の基礎的諸集団（とくに労働者社会）における労働者の自主管理的秩序の創出を通して社会全体を高度に分節化しながらも統合された、自律性をもちながらも連帯した、総体的機能的諸関連へと組み直していく（連合主義）展望をあたえる。

ブルードン主義の自主管理的連合主義は、区別されながらも補完的な二重の構造に立脚する。すなわち、1相互主義的経済民主制、2連合主義的政治民主制（社会的連帯性を表現するに、経済的關係については相互主義、政治的關係については連合主義と表現することに注意）。この二重構造性は、社会の基礎的諸集団たる具体的な労働者諸社会の組織における、区別されながらも対化された生産社会II経済的有機性と労働者の關係における政治性という二重の性格に由来する。これは人間存在が特殊化しながらも觀念においては關係全体をつかみ、そのことのゆえに協同的な労働に従事せざるをえないという労働存在の自然性にその根源をもっていることの基礎的集団次元における表現である。かかる基礎的諸集団、それぞれの労働者社会の自律性が多元主義的社会的ダイナミズムの動力であり、しかるがゆえに、相反的であると同時に均衡的な性格を社会にあたえる。対立—組成—対立—組成の社会的過程は社会的多元性の動的表現である。

かかる観点に立脚して、資本家社会—ブルジョア国家、圧制的国家管理主義的共産主義の同時的批判が可能となる。ブルードンははっきりとこれら絶対主義の二つの社会的發現形態に対する批判をおこなった。これは、資本家的所有と圧制的で統治者の国家管理主義が、搾取と支配

の器官としてふたつながらあらわれであることをみぬいてきた。国家においては権力の圧制的な所有が存在しており、所有においては圧制的搾取の状態が存在している。所有は搾取の用具であるがゆえに支配の用具となっており、国家は支配の用具であるがゆえに搾取の用具となっている。かかる認識は、多元主義に立脚して、これらが否定するのが多元的社会的自律性それ自体であることを導き出す。これら暴虐な器官に対する批判は、批判される対象にとつてかわる社会的運動の認識にたどりつく。

三 自主管理の社会的意味

こうした多元主義的思考は自主管理的な考え方を導き出す。すなわち、搾取的経済器官としての資本家社会に対する批判は、生産的剰余、資本が生産諸集団の多元性に基礎づけられた労働者社会の経済的機能に依存していることを発見させ、国家管理主義的先取の分析はかかる先取を可能ならしめる社会権力の疎外状態を、したがって、社会的に関連し合う諸集団の諸力の存在、真の社会権力の存在を認識せしめる。自主管理の方法が真の社会を生み出す方法として姿をあらわしてくる。政治性と経済性という二重の機能性において、これらを真に社会的に統一する主体としての労働者社会が発見される。自主管理はこの統一の方法であると同時に結果的に実現される社会形態をも規定する。

この論理は資本家的所有体制の廃止だけを結論する専制的な社会主義者、共産主義者の論理と対立する。資本家的所有を廃止しても、独裁的な国家に経済組織が、社会組織が委任され支配されていったのではなん

の意味もなくなってしまうのである。自主管理はこの問題を解決する。生産諸集団をその多元性のままに、人民をその多様性のままに、したがって、自由を保持しながら社会的に統合する論理が自主管理であるからである。生産諸集団の自己統治と連合、自主管理の経済体制を組織することが必要である。

経済社会を国家の支配するところとしてしまったらどうなるのか。すでに人のよく知るところである。唯一の独占体が社会を支配することになる。経済的諸力の超独占、くわうるに公的諸力の政治的な超独占が出現する。国家管理主義的共産主義国家においては、その人民からの収奪、搾取が具体的に目にみえる形で存在している。ただ一つの国家への一切の社会的諸力の集中は、実に逆説的に、唯一の経済的独占へむかう。あるいは独占的な経済の集中化への傾向をもつ資本主義の法則にしたがっているということになる。

自主管理によつて農業、工業、商業などの諸職能を最適に組織する経済社会を建設しなければならない。社会権力の疎外、社会外的制度としての国家を解消し、労働者社会の政治的機能の有り様を社会的に定めねばならない。

四 自主管理社会の構想

自主管理社会のおおまかなイメージをあたえておかねばならない。労働者民主制においては政治は経済の系であるから、経済的諸關係からはつきりさせていこう。しかしブルードン主義は社会的諸存在を考へるについで、諸存在の他のものに還元できないという独立性、自律性とそう

した諸存在の間に発生する連帯性の傾向が、あたかも遠心力と求心力のごとく存在していることをあらかじめ了解しておかねばならない。

さて社会的諸権力が、民主的に多元的統合体として構成されているとき、その社会・経済的性格は一言で、職能的地域の連帯化であるといえる。職能的関連と政治的関連とは地域を節目として交錯するが、それぞれ他地域との連帯関係をもとり結んでいる。職能的諸関連の各諸要素は、労働者諸社会つまり自主管理された企業にはかならない。職能的諸関連では具体的に農工連合が想起されよう。この相互主義的経済民主制の構造があらかたにされねばならない。所有論的には相互主義的、連合主義的所有と規定される。しかし農業と工業では若干性格が異なる。工業の場合は相互主義的所有(あるいは集团的所有)の連帯化による相互主義に立脚した経済社会であるが、農業の場合は論理の方向が逆で、個人的所有の連帯化による所有の相互主義化、集団化という性格をもつ。つまり耕作における個人的所有の連帯化、協同組合的農業連合体への再集団化である。(ただし農・工がかならずかかる所有論的条件を満さなくてはならぬということはない)。このような所有形態を成立せしめんとするのは、社会関係の諸作用のなかに所有を機能的に位置づけ、所有の特権を社会的に消滅せしめるという意図によっている。さてこのような所有形態が社会的に成立するためには、生産者としての個人、労働者社会の各次元における契約の有り方が問われねばならない。分業と協同的な経済行為の必要性が労働者社会を形成する根拠であるが、これは自由で自律的な集団が他に還元できない独立性、自律性としかるがゆえの連帯性

にか。相互主義、連合主義契約による社会的法が存在している。したがって法を制定する必要はない。だからその執行もない。それは社会をみまもるのであり、その固有の機能にもとる。つまり、将来を予測し、有益な情報を提供するある種の統計局のごとき機能、社会的諸集団間の矛盾の調停機能、主権的存在であることをやめ、社会的な一機能存在へと位置づけられるのである。連合的に組織化された社会においては、主権的代表者は各地方の自治議会(職能議会と地方議会)である。しかしかかる状態に達するまでの過程では、中央権力としての政府は政治権力の分散化運動をたすける先導者的役割を果たす。つまり自己否定的役割を果たすのである。順次、国家の役割を分解し単純化する方向で社会の疎外された諸機能を、国家は社会に返還していく。これは同時に、契約、連合、自発的合意にもとづく連合主義的共和制への社会の革命である。社会的機能存在へと変容した政府、連合主義政府は、先導者、社会的諸活動を鼓舞する存在、調整者になる。公共サービスについても、職能諸集団がこれをおこなう。しかし、信用制度、保険、運輸など公的サービスに従事することは排される。ただあくまで管理が主でなければならぬ。さてこのように制限された連合主義政府については、ある種の公共経済の一部となってしまう。

六 結 語

自主管理論は、基礎的経済諸集団の自律管理によって、分散化すると同時に連合した経済社会と連合主義的政治民主制によって構想されるアナキズム社会にかんする議論をふくむものとして考察されねばならぬ。

をもつということでもある。位階制的労働秩序にとつてかわつたかか労働者社会は、内的な必然性として、共通な事柄についてはより広範に契約的に関係し合っていかなねばならぬ傾向をもっている。したがって所有の存在の仕方にもあつて相互主義契約、連合主義契約がそれぞれ成立する。この契約は、相互主義的経済民主制と配偶をなす連合主義的政治民主制とをむすぶものである。ところで、職能の社会的諸関連には、消費者の結合し合つた諸集団の経済社会の管理への参加もふくまれている。また、住宅、保険、信用などの協同組合的組織化の問題も存在していることを指摘しておこう。

さて連合的政治民主制とはなにか。これは一言で分散化された国家の管理機能であるといえる。連合的政治民主制は、自律的に管理された諸地方の複合としての社会・国家を実現する。政治的諸関連は、人民の関係における諸機能の関連(政治的秩序)が、自由で自律的な労働者社会の組織化という内実をもつものとして表現される。

このような相互主義的経済民主制と連合主義的政治民主制は、一つの対として社会的な配偶構造をなす。そして、基礎的な労働者社会からはじまって、一地方、一民族を結節としながら世界大に拡大される。すなわち、基礎的諸集団の自己管理↓これらの連帯化↓連合的共和制↓(↓国際的同盟へ)もちろん社会的な意志決定の優先順位は矢印と逆である。

五 社会への機能返還

自主管理社会における政府とはなにか。分散化された政治器官とはな

い。自主管理論はアナキズムのなから有益な示唆をうけ、豊かにならねばならない。資本主義と国家管理主義的共産主義を同時に批判しうる地平からしか自主管理社会はみえてこないのであるから。

相互主義的所有と連合主義、国家を二本の基軸とする自主管理社会を詳細にあきらかにするのになければならない。実践の各段階で現行社会をいかなるものへと変えていくのか、アナキズムは秩序としていかに発現するのかについて究明しなければならぬ。

職能的エリートは、社会権力、人民の集合的諸力の疎外され奪われたものたる権力をわがものとし、強制力をほしのままにしている。個人や諸階層をわがものとし、公的権力Ⅱ国家自体をその好みのままにしている。自主管理的社会主義Ⅰ自由社会主義が要求されている。アナキズムは自主管理を通して秩序として客観的にも成立しうる。神秘的唯物論に立脚し社会を再び疎外状態におとし入れるのではなく、労働者Ⅰ農民の現実的な経験主義に立脚しつづつ多元的社会的構成のうちで、社会力を社会的に獲得し、人間を真に圧制から解放する秩序を積極的に提起していかなねばならない。

我々には真の問題がどこにあるかわかっている。

× × ×

日本における革命論の現状

広松渉『現代革命論への模索』について

奥沢 邦成

高度に産業化を遂げた現代社会における革命像とその方途を、主要に問題意識として擁しつつ明確に見据えている人、その理論的模索をすすめている人はきわめて少ないように思う。ことに今日の日本の思想・運動領域においては、その成果はともかく、その問題意識の定着すら十分に果されていないのが偽らざる現状ではないだろうか。その点で、『現代革命論への模索』は先駆的な成果ではないだろうか。「新左翼革命論の構築のために」と副題された広松氏の著作は、マルクス主義に立ちつつ現代革命を模索し論じた五つの論文、一九六四年から七〇年にかけて著述された論文によって構成されている。

本書の著者が、緻密さと柔軟な思考を備えたきわめて優れたマルクス主義者であることは、ここで改めて記する必要はないだろう。筆者が広松氏の著作に触れるのは本書が初めてである。それ故、この限られた了解内容をもって、現代革命論という主題のもとに論議するのはいささか乱暴かも知れないが、異なる立場からのコメントールとして、いくつかの批判を試みることにする。

一 三段階説の枠組み

著者が現代革命論を構築せんとする基本的認識は、マルクス主義運動の歴史的な三つの段階説として提出される。六〇年以降の世界史的動向を踏え、序説「新左翼運動の存在理由」において、現代とその革命を担うべく新左翼は次のように位置づけられている。

現在、マルクス主義運動は、まさに第三段階を迎えつつある。新左翼運動の存在理由を知るためには、この歴史的現実を直視しなければならぬ……

マルクス主義運動の第一段階は、マルクス・エンゲルスの時期に始まり、第二インターナショナルの「崩壊」を以って終息した。第二段階は、レーニンとその同志たちによるマルクス主義の中興に始まり、スターリン主義とその垂流が支配している今日を以ってまさに終焉しようとしている。(一九六四年執筆)

そして、現在の第三段階を必然ならしめている事情、すなわち時代を画する社会的経済的基盤の変化と、それに対応すべき思想と運動が選択

し模索すべき方向は、「歴史的現実に対する理論的関わりにおいても、また実践的関わりにおいても、かつて第二段階を必然的に成立せしめた事情と極めて類比的である」と指摘しつつ、方向提示の示唆的着眼点と述べている。

現代革命論構築にむけた以上の立論に対する批判的視点を次に列記することにする。

1、もつとも基本的なこととして、現代革命をマルクス主義運動の第三段階としてではなく、社会主義運動総体の新たな局面として捉える必要があるのではないだろうか。マルクス主義者である著者にとっては当然の枠組みかも知れないが、果してマルクス主義の枠組みが現在直面している問題に対して有効であるのか否かが問われていると思う。この点は、第一、第二段階と定式化された歴史過程の分析への疑問として後述するが、いずれにせよ、思想と運動、諸革命の歴史的位置づけは、マルクス主義という狭い枠組みに囚われずに再編成される必要があるだろう。

2、現在、社会主義総体が直面している課題がマルクス主義によって解決不可能であるという基本的認識は、次の点に依拠している。今日、われわれが真に問われているのは、労働や社会生活における個人々の自由を最大限に保障すると同時に、それを有効に社会化(社会連関に位置づけようという意味)しうる組織形態と運営と管理の在り方である。少なくともこの視点を欠いたのでは、革命が括弧つきの社会主義に陥らないという保障はなく、それをも無視しての革命ならば、何のための革命かという疑問に致らざるをえないだろう。現在の社会主義諸国とその革命への批判は、その歪曲せざるをえなかった社会・経済的背景と、思想

・運動上の批判的分析を踏えた地平に推し進められなくてはならない。その批判を踏えつつ、現代における革命論をどう構築していくのかという観点に立たない限り、社会主義はもはやその説得力を回復しないだろう。もちろん広松氏もこの点には触れている。しかしそこの比重は、やはり政治権力の奪取という構図の範ちゅうに重点が置かれているのである。例えば、「下からの労働者自己権力の運動」と述べられるときは、それがある権力打壊の局面に向けられた組織と運動として論じられるなら「下」でもなく、「自己権力」でもなく、特定の目的に向けられた「運動」でもない、それ自体が目的と運動を表現しうる組織を考えたい。その表現のためには、現代革命は取りも直さずその実現過程であると考え、それはマルクスやマルクス主義者が追求した方向とは異なる方位に問題を組み立てる必要があると思う。以上が、マルクス主義の枠内での設問が有効性をもたないとする批判の論拠である。

3、マルクス主義運動の三段階説に立ち入っていくと、まず、マルクス・エンゲルスの第一段階とロシア革命を主導したレーニン主義の第二段階とを安易に直結しすぎるのではないかと、根本的な疑問がある。もちろんマルクス主義としてのイデオロギー上の潮流を無視し否定するものではない。ただ、思想や運動が個別具体的な社会経済的背景と切り離して考えられない以上、単にイデオロギー的継承関係として定式化することに疑問をもつのである。それは客体化されねばならない。つまりレーニン主義が、マルクス主義の一つの展開であるとするなら、それは少なくとも一つの反作用としてのマルクス主義批判を何らかの形で果し

ていると考えることは不当ではないだろう。問題にしたいのは実はこの点である。継承関係においてこの問題を等閑視することは致命的な誤まりを犯すことになる。一つには、イデオロギーとしての継承関係（個別具体的な構成要素での分析）、二つには、運動レベルでのいわばイデオロギー継承の有効性を検討すること（イデオロギーの枠組みやその構成要素がどのような有効性を運動過程でもちえたのか、極論すれば例えば権威づけとしての借用といった場合もある）、三つには、もっとも重要で欠かせないと思うのだが、運動が基盤とした社会的現実の位相との関連をみることに、以上を再検討する必要があると考える。第一項についての分析は本書において十分に展開されているし、二・三項の素材となる分析も本書から引き出せると思うが……。

4、前項で意図されたことが、以上の考察を踏えないならば、例えば中国革命やその後に生じたベトナムに到る諸革命を貫く世界史的な視点が出てこないのではないかと、という積極的な意図に通じる。それはまた、「変論」せざるを得なかった社会主義革命の現実を、変論故に排するのではなく、変論せざるをえなかった社会的経済的な動因の分析に基づく社会主義運動の新しい視野を獲得することでもあろう。あるいは次のように言い換えられる。すなわち、マルクス・エンゲルスの第一段階とされた現実的社会の個性（一八九〇年に一つの画期を含む西欧の歴史過程）と、第二段階であるロシアの一九〇〇年以降の現実という各々の運動が基盤とした社会の異質さをもつと基本的な因子としないならば、革命もしくは社会主義そのものの深化を果せない。何故なら、社会主義が主観においてではなく、現実社会の在り方により多くの接点を

置く以上、現実社会の分析、社会とどう関わり社会をどう変革するかの思考と実践は、もっと社会に引きつけたところで展開されなくてはならないであろう。以上の点は、現代革命の基盤である各々の社会（高度産業化社会、社会主義諸国、第三世界）において、歴史的教訓としても措定されることになるだろう。

5、第一段階と第二段階は、それぞれ産業資本主義と金融資本主義（帝国主義）に対応するとされる（第三段階は、国家独占資本主義に対応する）。資本主義の発展段階としてのこの過程は、しかし革命理論、とくに体制の破局崩壊理論とは整合していない。つまり前者における失業と恐慌による窮乏化理論はいうに及ばず、後者の「帝国主義戦争を内乱に」としたレーニンの図式においても、資本主義の発展過程からすれば派生的、かつ（後進諸国に）限定された理論であったことに注意しておきたい。これは、レーニンの革命戦略の正しさとは別に、そのテーゼが資本主義体制そのものではなく、それは外的位置を占めた体制の、質本主義発展の外的波及力を誘因として成立しているという意味である。この点でもっとも貴重な示唆をもつのはドイツ革命である。二十世紀初頭におけるドイツ革命の歴史的位置づけは、革命運動とその理論にとって重要である。われわれは革命の成功ということに必要以上に眼を奪われてはいないだろうか。ときとしてわれわれは成功よりも失敗から多くを学ぶことがある。（仮に、レーニン主義がドイツにおいて有意義な有効性を発揮していたなら、もちろん、ここでの問題提起は意味を失なう。）

6、従って、第一段階から第二段階に示唆される断層は、そこでの転

換（必然性）から第三段階に現代革命の指針を得ようとする著者の意図を穿り多きものとはしないだろう。すなわち、第一段階が直面し克服しきれなかった資本主義社会の一つの変貌はそのまま、現在、新たな転換を経て一貫して社会主義革命論の前に立ちふさがっているのである。ロシア革命は、この課題からはずれた一九世紀ロシアにおける一つの解決であって、第一段階を解く鍵を何等提出しはしなかった。それは一面において、とくにその後の革命運動の一半に対しては、問題を深化させるよりは革命の問題を押しとどめ、引きもどす役割を果たすとすら言える。それ故に、その転換を必然ならしめたとみる著者が、第二段階から第三段階への転換と前者との間に類似をみるのは、それが実は半世紀を経ていささかの衣裳がえをした同一物に他ならないからである。

7、くり返しになるが、ロシア革命の評価は一九世紀マルクス主義運動に引きつけてではなく、中国革命などその後を生じた諸々の社会主義革命総体との関連において、すなわちそれらの先駆として独自のカテゴリーを形成するのではないかと、考えるがどうであらうか。

8、本書で広松氏が展開している新左翼論については、いささかの異論をもつ。定義如何の問題とも言えようが、やはりマルクス主義の領域に狭く規定しすぎているように思う。六〇年代後半の運動を準備し、形成したのはもっと広い思想潮流だったと思うし、仮に新左翼をマルクス主義に限定するならば、その枠組みに汲み込まれない部分への分析と評価とを踏まえる必要があるように考える。新左翼論については第四節で詳論したい。

9、最後に、現代革命論の構築に際して不可欠と考えられる第三イン

ター（コミンテルン）の、すなわちレーニン主義もしくはその発展としての革命戦略（もしくはその破綻）に対する明確な評価と批判が本書において欠落していることを指摘しておきたい。現代を一つの転換と規定する以上、この作業を抜きにしては現代革命を模索しえないと思う。以上、九項目にわたって本書で展開されているマルクス主義運動の三段階に対する批判点を列記してきた。次いで、それらの中から主要な主題を再構成しつつ、疑問点をつけ加えたいと思う。

二 革命の戦略

現在、われわれが擁している社会主義や革命の思索的・理論的な内容は、われわれが思っているほどに豊かなものではない。それはむしろ貧困の名に値するといっても決して過言ではないだろう。

次に革命の戦略論という点に絞って、レーニンが一九世紀マルクス主義から受け継いだもつとも重要、かつ有効性をもちえた革命の戦略戦術論を取りあげ、マルクス主義が提示しえたその内容を、現代革命論の構築という主題に引き寄せて検討したい。（広松氏の本書での分析を利用させていただく。）

マルクスが革命の戦略論として確定し、レーニンやトロツキーに深く影響を与えたものに、一八五〇年三月の「共產主義者同盟中央委員会の同盟員への回状」があるという。これは中央政治権力の奪取にむけた戦略論としてはきわめて優れたものであることに筆者も賛同する。この「回状」はブランキにつらなる革命家の影響があり、しかしブランキ流の少数者革命から多数者（階級闘争）による革命という明確な相違がある。

「回状」で触れられた内容はその後第一インターにおいてより緻密で具体的なものに深められた。ここではその個々の中味ではなく、次の諸点を確認し指摘する必要がある。(1)4項は広松氏の所論による。)

1、この「回状」によって示された革命の戦略論は、一八五〇年以前の社会分析を基礎として、主要には一八四八年革命の総括として成立した。そこで意図された革命は、言うまでもなく政治権力の奪取を目指す政治革命であり、またブルジョア革命をモデルとし、都市市民を中心とした武力蜂起をもって権力体制を崩壊に導くという方法論の延長線上にある。つまり「回状」で定式化された革命の形態、その方法と戦略はこの二つの主要な因子によって形成されていた。

2、一八七一年のバリ・コミューンを最後に、ヨーロッパにおける武力闘争はことごとく失敗に帰し、他方では議会への進出が急速に開始される。以上の変化を基底的に決定したのは、約言すれば、近代国家の確立(経済的には産業資本主義の確立から金融資本主義段階への伸長、政治的には議会制民主主義の定着)である。そして整備された法および治安秩序と、警察および軍事制度は、もはや革命の暴力的方法を不可能とした。同時に「回状」の有効性は、戦略図式としての平面的な有効性は保ちえても、議会主義を勸告せざるをえない方法論においては、その現実性を失ったと考えるべきであろう。(議会主義という形式と、その現代社会との結びつきの程度、つまり体制化のレベルを分析する必要があり、それは現代にも通じる課題である。)晩年のマルクスとエンゲルスは、こうした資本主義の変質を認めつつも、それに対応すべき革命論を提出しなかった。以上の過程に生じた現実との矛盾は、例えば一八九

一年のドイツ社会民主党のエルフルト綱領をめぐるエンゲルスとカウツキーとの間に生じた食い違いが如実に物語っている。

3、資本主義の変貌に対応する形で提出されたベルンシュタインの修正主義路線をめぐって論争が展開された。修正主義に対する教条主義の論争は、しかし問題を解決にむけて深化させることなく、両派は異なった形のもとに、共に、現実の流れに巻き込まれていった。(以上が、マルクス主義運動の一つの流れ、一つの段階を画しているという見方には異存はない。)

4、レーニンがロシアにおいて採用したマルクス主義の革命論は、ロシアの後進性の故に、その方法と戦略において有効性をもちえた。広松氏の指摘を借用するなら、

読者は、レーニンの描く一九〇五年のロシアの情勢が、われわれが先にみておいたところのマルクス・エンゲルスの眼に映じた一八四八年のドイツ革命時の情勢と、余りにも似ていることに驚かれるであろう。…当時のロシアにおいては『共産党宣言』で打出された革命路線が、アクチュアリティをもっていたし、ブルジョアジエに期待を寄せることができないということが対目的にとらえられている以上は、『宣言』というよりも、むしろ、一八五〇年の『回状』がそのまま有効性をもっていたということができよう。

(だが、その有効性が、しかし、帝国主義段階の資本主義国家に対する普遍性をもつものでなかったことは、改めて指摘するまでもないだろう。)

5、従って、ロシア革命の実現は、先進資本主義諸国家の革命にとつ

てはそれ自体が何等かの直接的な寄与をもたらすものではなかった。むしろ現実の政治的力関係のもとに、資本主義の変質に直面した革命論の課題を結果的にはすり代える役割を果たした。一九世紀末に提起された革命論の新たな構築の必要性は、それ故に深められることなく、放置され社会主義思想そのものに貧困さをもたらしたのである。

四項までの指摘は、広松氏の所論を要約し配列したものであり、1、3項がマルクス主義運動の第一段階、四項が第二段階への転換に当たる。そして前述したような三段階が構成されるのであるが、筆者が五項において言わんとした内容を三段階説に引きつけて表現するなら、第一段階が延々と第二段階に継続していること、かつ第二段階がイデオロギ一的にはマルクス主義にカテゴリー化されても、ロシア革命後の社会主義諸革命を含む独自のカテゴリーを形成すると考えることの方が、現代革命論の構築に際しては有効ではないかという考え方である。

三 修正主義をどう越えるか

一八九〇年を前後して資本主義社会の変化に直面したマルクス主義は、ベルンシュタインの修正主義路線と、カウツキーに代表されるマルクス主義の原則に固執する教条主義的墨守という二つの流れを生み出した。前者は現実社会への皮相な分析と妥協的歩み寄りに進み、後者は社会の変化を無視した主張をくり返しながらも、現実の足をすくわれ埋没することを余儀なくされた。こうして、革命論は深化されることなく、しかもロシア革命に権威づけられたレーニン主義が迂回しつつ、その閉塞状態を開閉するものとして受容されるに到った。これが一九二〇年以降を

支配した革命論(その主流を占めたマルクス主義)の有様であった。

しかし、資本主義の一層の展開過程がレーニン主義の神話をつき崩し、再び革命論の問題の所在をありのままに露呈したときに、「プロレタリア独裁」の放棄という先進資本主義諸国における共産党の路線変更が一勢に提唱されることになった。この路線がかつてベルンシュタインが持ち出した方向と軌を一にすることは、構造改革派とベルンシュタインの同質性を指摘する広松氏の所論によっても明らかである。本書よりベルンシュタインの骨子を引用させてもらおうと、次のようである。

- 1、議会を通じての平和的の革命。
- 2、日常改良闘争の重視と、中間的諸階層に対する同盟政策。
- 3、民族的利害に対する現実主義的対応。
- 4、常備軍の廃止と全人民の武装―常備軍を人民軍に変換する。

これは、四項の武装の問題を今日的には不要であるとみる立場に立ちつつ、議会主義による政権獲得、構造的諸改革の重視と中間階級との連合、社会主義に至る各様の道(国家利益の重視)というように、プロ独放棄後の各国共産党の路線のいくつかの軸にそれぞれ対照することができ。

問題はきわめて明白である。かつてと同様に、修正主義路線を選ぶか、あるいは教条主義に立つか、あるいはさらに第三の道を模索するかである。現代革命はもちろん、第三の道に位置するであろう。しかしこの点において、著者広松氏は次のように語る。

マルクス主義運動は、現在、かつての「修正主義論争」当時と全くアナログなズレンマに逢着しているのであって、マルクス主義

運動が陥っている「第二回目の思想的・実践的危機」は、問題そのものの歴史的構造においても、「第一回目の危機」と類比的であり、従ってまた、この危機を克服しえんがためには、かつてと同様な段階的飛躍が要請されるはずである。

だが、ここで何回かくり返した著者への批判を取りあげなくてはならない。それは、

1、両者は、類比的・同質的であるとみるよりも、全く同一の問題、同一物であると考えの方が正しいのではないかと。
2、修正主義論争は、実際において解決をみないままに放置されていたのであって、それが再び脚光を浴びていると理解する。これが前項の論拠である。

3、従って、レーニン主義を問題解決の段階的飛躍と解することはできず、その図式から修正主義を克服する示唆は得られない。極論するならば、その図式にもとづく類推から想起されるのは唯一、第三世界革命や辺境革命論の類いである。

4、くり返しを厭わずに言うなら、レーニン主義による危機の解決、その段階的飛躍とされるものは、中国革命などの、その後続いた社会主義革命と社会主義国家建設という世界的な歴史過程における先駆としてカテゴライズされるべきであろう。

四 新左翼の位置づけ

新左翼をどのように捉えるのか。それはまだ混沌とした夾雑物を多分に含み、かつ明確な主張内容を提示していないというべきであろう。

独裁の構想を継承・展開しつつ、その実現を実践的に追求してやまないであろう。
しかし、新左翼の思想的な混沌さは、逆説的に言えば、著者が考えている以上に新左翼総体がマルクス主義やレーニン主義を払拭したところに、実は起因しているともいえるのではないかと。この点は、フランスのゴースムなどの考え方が明確に打ち出しているし、イギリスのニュー・レフトの思想もレーニン主義とは相容れないようにみえる。もともと新左翼といっても各国に特有な社会的歴史的な背景をもっている一様には語れないし、またどのように括るかによっても差が出てくるだろう。とくに日本の場合にあっては、運動に占める政治党派の比重が大きかったし、党派に対抗する力を無党派がもたえなかったという事情がある。

五 革命論構築にむけた課題

著者は、現代革命論構築にとって重要視される問題として、次の三点をあげている。(一九七〇年)

- 1、労働者大衆の日常性への埋没からいかにして脱出しようか。(疎外論に対しては、人間性の名において告発するのでは、社会変革の具体的なヴィジョンは得られないとして、科学的立場を主張している。)
- 2、社会主義社会のヴィジョンが問い返されている。新社会のヴィジョンをどう再構築するか。
- 3、客観的条件、当の経済的機構が安定的に再生産されている限り、ブルジョアジーの階級的支配は動揺しない。

まだまだ主張の思想的発酵がなされず、その理論的な蓄積も不十分であるだろう。一つには、思想上の独自の追求と現状分析を基礎にした理論的蓄積の乏しさという、日本の社会主義運動の歴史的な要因が作用していることも否めないだろう。

要言すれば、マルクス主義運動は、国家独占資本主義の歴史的現段階——変換せる「社会主義国家」の現在存在と相補的な現代資本主義世界に対する永年来的理論的・思想的・実践的な適応不全を、今やようやくして克服し始めている。謂うところの適応不全の抗原体反応、第二インター末期とアナログスなこの現局面を超越すべく、かつてのチンメルヴァルト左翼と類比的に、マルクス主義の新しい段階を拓くべく先駆的に登場しつつあるもの、それが「新左翼」の本流であり、その実践的・思想的位相は、マルクス主義運動の第二段階から第三段階への跳躍面を摩しつつあるように観察される。

ここで著者が新左翼の本流と考える思想潮流が、果して本流に一九六〇年代後半期の運動を準備し形成した新左翼のもっとも特徴的な質を代表するかどうか、また著者のいうような歴史的位相を占めるものか、検討を要するところであろう。著者は、他のところでより明確に述べている。(「朝日ジャーナル」一九七六年六月四日号「マルクス主義と『プロ独』の問題」より)

新左翼は、もとより、レーニン教条主義を事とするものではないが、その本流は、レーニン主義の革命性を現代的諸条件のもとで発展的に継承しつつ、スターリン主義的独裁による革命の篡奪を防止するために、マルクスの説いた、かのコミューン型プロレタリア

また、一九六四年の論稿から引用すると、「現代資本主義のもとでは、革命路線をどの方向で再構築することが歴史的に要請されているか、臆断をおそれず幾つかの論点を挙げることにしたい」として、

- 1、「破局」の自動的な到来を大前提にせざる戦略を構築すること。
- 2、革命的ゲヴァルトの新しい組織形態を創出すること。
- 3、生産の場に立脚した労働者階級の自己権力と革命的議会主義との結合。

現代革命の構築にむけた課題として取りあげられた諸項目の一つひとつを詳論する余裕はないが、しかしここで列記された各項目のもつ説得性が、次に引用する革命のイメージに集約されるのだろうかという点まどいはある。それは、生産点を基礎にした大衆的武装叛乱型革命路線として規定される。

とりあえず指摘しておきたかったのは、突出した叛乱型闘争を汎発化することによって国家独占資本主義のメカニズムそのものを逆用して体制的危機を触発し、そこに生ずる危機的状況のエネルギーを相乗的にキャナライズしつつ、ゲヴァルトザームなマッセン・デモを伴なうマッセン・ゼネストを特殊部隊の革命的ゲヴァルトと有機的に結合し、「ソヴェト型」の大衆的自己権力組織を二重権力的に形成しつつ、議会主義的擬制そのものを弁証法的に逆用することによって既成指導部に対する「主要打撃」を達成し、よってもって真の革命的権力を樹立するというシェーマが定立され、しかも、近年における欧米ならびに日本における初発的な実践によってそのリアリティーが広汎な活動家層の意識に刻印され(78頁へつづく)

臨時商会公報局は、市民に消費材をくまなく分配した。

通達

食糧配給基地の革命的三頭政治局は、空カンを棄てないよう軍事部隊と市民に要請する。理由は、空カンの再利用である。尚、保持者は、次の住所へ送るように（質問事項と住所）。

三月十七日

クロンシュタットは昨日崩壊した。数千にのぼる水兵や労働者の死体が路上に横たわっていた。

囚人と人質の処刑が続いていた。

三月十八日

戦勝者は、一八七一年のコンミュニンの記念日を始めた。トロツキーとシノヴェフは、バリの反逆者たちを虐殺したティエールとガリフェを色褪せたものにした。

(元)

『クロンシュタット・イズヴェスチャ』の翻訳も、今回の第八回をもって最終回を迎えました。ほぼ三年にわたる長期連載であり、またその期間は、アナキズム誌の歩みとはほぼ軌を一にするものでした。訳者の吉原文明氏にねぎらいの言葉を送りたいと思います。

ロシア革命とその後、ソ連の社会主義国家の建設がどのようなもので

あったかは、おそらくこれから正当な歴史的評価を受けることになると思います。クロンシュタットの蜂起は、すでにポオーリンを始め、二三のアナキストによる報告が出版されていますが、記録としてこの『イズヴェスチャ』紙の翻訳は、クロンシュタットを生きいきと描き出し、おり、欠かせない資料の一つとなると思います。

(編集部)

(37頁よりつづく) はじめているということである。(一九七〇年) 先の課題に比較すると首肯し難い方向だと考えざるをえない。既存体制の自動的破局を前提とせずに、革命的ケヴァルトの新たな組織形態の創出という二項を短絡させると浮びあがってくる革命像なのかも知れないが、他の項目で指摘された現代革命にとってもっとも基本的かつ緊急な問いを、古典的の革命観の弥縫策の前に放棄しているように思えて仕方ない。

社会主義社会、新社会のヴィジョンをどのように再構築するのか。権力打倒へむけた組織運動論としての労働者組織ではなく、労働者を体制的日常性から解き放ち、労働者個々人の自立にむけた生産の組織化は如何にして実現されるのか。現代資本主義社会の分析と批判を踏えつつ、模索しつみ重ねていかねばならないこれらの課題が、政治革命路線のもとにサポータージュされているのではないか。この点に多大な危惧を禁じえないのである。